家　庭　科

事例１　「食事と健康」における指導の工夫
～　対話を通して、「和食のよさ」を考えよう　～
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p. 72

事例２　「衣生活の科学と文化」における指導の工夫
～　対話を通して、「これからの衣生活」を考えよう　～
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p. 79

研究協力委員

栃木県立宇都宮白楊高等学校　　教　諭　　青 柳 真理子

栃木県立今市高等学校　　教　諭　　髙根澤 瑠 美

研究委員

栃木県総合教育センター

研修部　指導主事　　渡 邊　久 子

○　家庭科の学びを深めるために

平成 30 年３月に公示された高等学校学習指導要領では、共通教科の家庭科の目標は、以下のように定められている。

> 生活の営みに係る見方・考え方を働かせ，実践的・体験的な学習活動を通して，様々な人々と協働し，よりよい社会の構築に向けて，男女が協力して主体的に家庭や地域の生活を創造する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。
> (1) 人間の生涯にわたる発達と生活の営みを総合的に捉え，家族・家庭の意義，家族・家庭と社会との関わりについて理解を深め，家族・家庭，衣食住，消費や環境などについて，生活を主体的に営むために必要な理解を図るとともに，それらに係る技能を身に付けるようにする。
> (2) 家庭や地域及び社会における生活の中から問題を見いだして課題を設定し，解決策を構想し，実践を評価・改善し，考察したことを根拠に基づいて論理的に表現するなど，生涯を見通して生活の課題を解決する力を養う。
> (3) 様々な人々と協働し，よりよい社会の構築に向けて，地域社会に参画しようとするとともに，自分や家庭，地域の生活を主体的に創造しようとする実践的な態度を養う。

今回の改訂で示された「生活の営みに係る見方・考え方」は、生涯にわたって自立し共に生きる生活を創造するために、「家族や家庭、衣食住、消費や環境などに係る生活事象を、協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築等の視点で捉え、よりよい生活を営むために工夫すること」としている。ここで示された視点は、家庭科で扱う全ての内容に共通するものであるが、学習する内容によって重点の置き方や視点を変えることが大切である。例えば、衣の生活に関する内容であれば、「健康・快適・安全」や「生活文化の継承・創造」を主として考察する視点とし、取り上げる内容に合わせて、生涯を見通した生活を営む上で大切な「持続可能な社会の構築」の視点も加えていくことなどが考えられる。このようにそれぞれの視点を意識しながら、よりよい生活を営むために考察したり、工夫したりすることが重要である。授業を構想する上で、これらの視点を意識しながら、単に知識と技能を習得するだけでなく、生徒が考えたり判断したりする機会を授業の中で設けていくことで、生活を総合的に把握し実践する力を身に付けさせていくことができる。これまでも家庭科では、実践的な力を身に付けることを目指して、体験学習、グループ学習、調べ学習等を取り入れて授業を行ってきたが、これらの学習活動を通して学習することにより、習得した知識及び技能が生徒自らの生活の中で生きて働くようにすることが求められている。この観点からも、「見方・考え方」を働かせることによる深い学びが求められており、それに向けて授業改善を進めていかなければならない。

本調査研究では、生徒が学習内容を自分の事として捉え、自分の課題を認識し、その解決に向けて実践できることを意識した指導計画を立て、よりよい自己の生活について考える授業実践を行った。

事例１　「家庭基礎」において「日本の伝統的な和食」を題材に扱った。「和食のよさ」について様々な観点から捉え、自らの考えに広がりをもたせることで、今後のよりよい食生活を考えるような、学びを目指した。

事例２　「家庭総合」において「環境に配慮した衣生活をつくる」を題材に扱った。より多くの人と関わる学習活動を通し、衣生活の現状を見つめ、生活者として課題意識がもてるような、学びを目指した。

事例１　「食事と健康」における指導の工夫 ～　対話を通して、「和食のよさ」を考えよう　～	
単元名	＜家庭基礎＞　食生活を見つめよう
これまでの課題	生徒にとって食に関する興味・関心は高い。しかし、生徒は自身の食生活が満たされているため、自分以外の食生活については関心が低く、授業で扱われる食生活は一般論として捉えられ、自分事としての学びになっていない。そのため、学習した内容から自分の食生活を振り返り、改善につなげようと実践する生徒は少なかった。
授業改善のポイント	生徒たちが自分の食生活について振り返るために、クラスメイトとの対話を繰り返すことで、食生活に対する多様な考え方を知る授業実践を行った。「和食のよさ」について考え伝える活動を通して、日本の食生活の変遷から現代の食生活の問題点を知るとともに、生涯を通して健康に過ごすための食生活に課題意識をもてるようにした。

１　指導観

(1) 本単元について

私たちは、生涯を通して健康を維持するために食事をしている。それと同時に、食事には人生の楽しみや文化を伝承する役割もある。食生活に関わる、基礎的・基本的な知識と技能を実習や献立作成を中心とした学習活動を通して身に付け、生涯を通して健康や環境に配慮した食生活を営んでいこうとする姿勢を身に付けさせたいと考えている。

(2) 生徒の実態

食に関する興味・関心は非常に高いが、家庭科の授業における発言や発表などには消極的である。調理実習は積極的に活動しているが、調理手順や片付け等において家庭生活での経験の不足が見られる。また、自分の昼食が中学校までの学校給食と比べ、栄養素に不足があると気付いていても、多くの生徒は自分好みの食生活に満足しているため、健康を考えて食生活に注意を払う様子はあまり見られない。

(3) 生徒に身に付けさせる力

食は、人間にとって生きることに直結する重要なものであるため、食が人々に与える影響について、自分自身の問題として生徒に捉えさせたいと考えた。私たちが毎日営んでいる食生活について学ばせる際に、中学校までの学習を踏まえ、従来の知識を教えるだけでは、自分や家族の健康を保持し、栄養と嗜好を考えた献立作成などの実生活に即した必要な技能を身に付けることは難しい。そこで、「ホームステイに来た外国の高校生へ『和食のよさ』を 20 秒間でＰＲすること」という課題を提示することで、グローバルな視点で自分の食生活を振り返り、課題意識をもち、見直しへと実感を伴わせながら考えられるようにしたい。これから食文化を継承し、食生活の計画管理をしていくということを意識させ、自分の事として考えて実践していく力を身に付けさせたいと考える。

２　単元の指導計画及び評価計画

○　単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
自分や家族の食生活に関心をもち、主体的に学習活動に取り組もうとしている。また、調理実習計画や調理実習について関心をもち、実践的な態度を身に付けようとしている。	和食のよさについて考え、まとめたり、表現したりしている。	調理実習を通して、基礎的な調理技術や環境に配慮した調理技術を身に付けている。また、ライフステージの異なる家族に合わせて、適切な献立作成ができる。	食生活を振り返り、食生活の機能や課題について理解している。また、栄養、食品、調理、献立に関する基礎的・基本的な知識を身に付けている。

○　単元の指導計画及び評価計画（総時数６時間）

時	学習内容	評価の観点				評価規準
		関	思	技	知	
1	食生活の機能と課題	○			○	・食生活を振り返り、食生活の機能や課題について理解している。 ・自分や家族の食生活に関心をもち、主体的に学習活動に取り組もうとしている。
2 本 時	和食のよさ		○			・和食のよさについて考え、まとめたり、表現したりしている。
3	調理実習の献立と調理実習計画	○			○	・栄養、食品、調理、献立に関する基礎的・基本的な知識を身に付けている。 ・調理実習計画について関心をもち、実践的な態度を身に付けようとしている。
4 ・ 5	調理実習 ご飯、焼き魚、 筑前煮、酢の物、 かんぴょうのすまし汁	○		○		・調理実習について関心をもち、実践的な態度を身に付けようとしている。 ・調理実習を通して、基礎的な調理技術や環境に配慮した調理技術を身に付けている。
6	家族の献立を立てよう			○		・ライフステージの異なる家族に合わせて、適切な献立作成ができる。

３　本時の展開（第２時）

段階	学習活動	指導上の留意点	評価（方法）
導入 ５分	○個人活動 ・前時の学習内容を確認する。 ・本時の学習内容を確認する。 ・「和食のよさ」について考え、ワークシートに記入する。 ・活動について、進め方を確認する。	・「和食のよさ」について思い付くことを書くよう伝える。 ・グループ４人が、それぞれのブロックに分かれることを説明する。	
展開 40分	○エキスパート活動 ・各グループのメンバーが４つのブロックに分かれ、資料の内容について話し合う。 ・資料について情報を整理する。 ○ジグソー活動 ・４つの資料を持ち寄り、それぞれの資料について説明する。 ・課題「ホームステイに来た外国の高校１年生に『和食のよさ』をＰＲしよう！（20秒）」を確認する。 ・４種類の資料から持ち寄った知識を組み合わせ、課題について話し合い、ホワイトボード・ワークシートにまとめる。 ○クロストーク活動 ・各グループ「ホームステイに来た外国の高校１年生に和食のよさをＰＲしよう！」を発表する。	・４種類の資料（Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ）を用意し、１人１種配布する。 資料Ａ：日本型食生活と５つの味 資料Ｂ：年中行事と郷土料理 資料Ｃ：食文化（旬・おもてなし） 資料Ｄ：供給純食料の推移など ・異なる観点から見た資料を与え、その資料のエキスパートになるよう伝える。 ・自分の言葉で分かりやすく表現するよう促す。 ・エキスパート活動で分かった内容を自分の言葉で説明するよう促す。 ・新たな課題について、確認させる。 ・グループ、全員で話し合ってまとめるよう声をかける。 ・ホワイトボードのまとめ方を助言する。 ・各グループの考えの特徴を明確にする解説を適宜加え、生徒が思考を深められるように支援する。	【思考･判断･表現】 和食のよさについて考え、まとめたり、表現したりしている。 （ワークシート・観察）
まとめ ５分	○個人活動 ・「和食のよさ」についてまとめる。 ・次時の学習内容を確認する。	・「和食のよさ」について再びまとめるよう伝える。	

4　実践の様子

(1) ワークシート作成

次のように、ワークシートを作成し、授業展開の工夫を行った。なお、この展開を構想するに当たっては、東京大学 CoREF の知識構成型ジグソー法を参考にした。

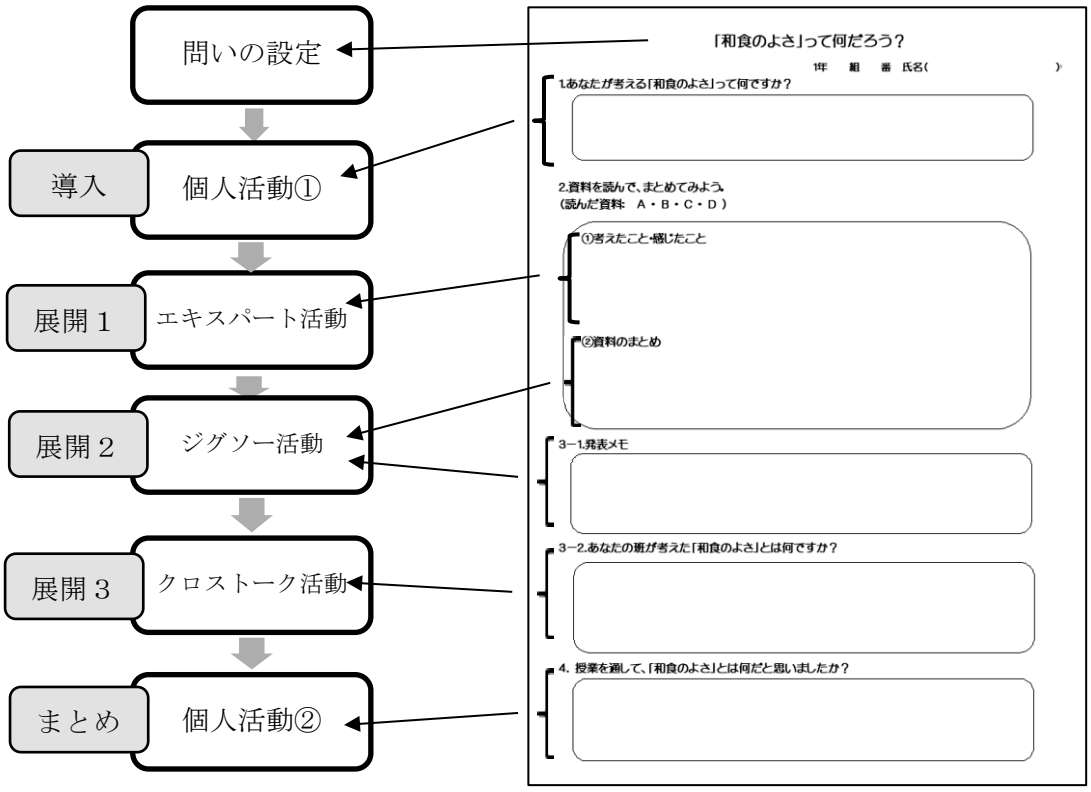


図１　授業展開の流れとワークシート

(2) 授業実践

ア　導入

「あなたが考える『和食のよさ』って何ですか？」という問いを設定した。「和食」という言葉は、誰もが何度も耳にしたことがあるはずであるが、ワークシートの１（**図１**）に自分の考えを記述できる生徒と、考え込んでしまう生徒に分かれた。そこで、机間指導をしながら、「和食の定義とは何か」「和食と洋食の違いとは何か」「和食の味付けとは何か」などの助言を工夫することで、考え込んでしまう生徒も「和食のよさ」を書くことができた。自らの考えを記述して表現することで、自分の考えを整理することができた。

イ　展開１

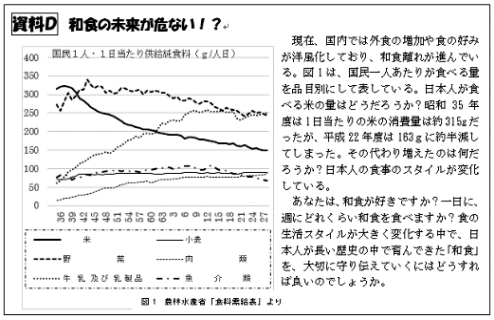
資料Ａ～Ｄをもとに「和食のよさ」のヒントとなることを考えるために、４ブロックに分かれて着席した（**図２**）。

資料Ａ…日本型食生活（一汁三菜）、５つの味（甘・塩・酸・苦・うま味）について
資料Ｂ…年中行事と郷土料理（しもつかれ）について
資料Ｃ…旬のものと器の一工夫がおもてなしであることについて
資料Ｄ…国民１人１日当たりの供給純食料と和食の進化について

この活動では、資料について情報を整理してまとめ、その後、グループのメンバー４人が別々の資料を持ち寄り、説明し合うことを伝えた。そのため、資料に書かれた内容や意味について理解を深めエキスパートになるよう注意を加えた。真剣に資料を読み、自身の知識を問いなが

ら、グループのメンバーに伝えたい部分に下線を引き資料を読み込む活動を行っていた。グラフ等の読み取りの部分では、同じ資料を基に、ブロックで話合い活動をして考えを深めていった。グラフから言えることはどんなことなのか、お互いの考えを比較した。相違点がある場合は、なぜそのように考えたのか、時代背景や生活スタイルも考慮しながら、生徒は何度も何度も情報を読み、対話を繰り返していた。考えを伝え合うことで納得できる答えを探し、その後、自分の言葉で分かりやすくワークシートに表現していた。しかし、限られた時間の中で自分にとって資料のどの部分が重要なのか精選し、要点をまとめる作業に苦戦する生徒もみられた。

図２　真剣に資料を読む様子



資料D　和食の未来が危ない！？

現在、国内では外食の増加や食の好みが洋風化しており、和食離れが進んでいる。図１は、国民一人あたりが食べる量を品目別にして表している。日本人が食べる米の量はどうだろうか？昭和 35 年度は１日当たりの米の消費量は約 315g だったが、平成 22 年度は 163ｇに約半減してしまった。その代わり増えたのは何だろうか？日本人の食事のスタイルが変化している。

あなたは、和食が好きですか？一日に、週にどれくらい和食を食べますか？食の生活スタイルが大きく変化する中で、日本人が長い歴史の中で育んできた『和食』を、大切に守り伝えていくにはどうすれば良いのでしょうか。

図１　農林水産省「食料需給表」より

図３　配付資料（一部抜粋）

ウ　展開２

配付された資料についてまとめたものを４人グループに持ち帰り、資料Ａから順に説明する時間を１分ずつ設けた。展開１でワークシートに自分の言葉としてまとめていたため、スムーズな情報の交換ができていた。普段は自分の考えを口にしない生徒も、グループのメンバーに自分のもっている情報を伝えなければならないため、恥ずかしそうにしながらも、一生懸命に伝えていた。情報交換では、自分が担当した資料と、他のメンバーの資料を関連付けて、和食の多様さに新たな気付きがあった。「おもてなし」と一言でいっても、それぞれの考えが違っており、自分とは異なる考えに触れることで、更に和食に対する考えを深めていた。

資料の情報を共有できた頃、「ホームステイに来た外国の高校１年生に和食のよさをＰＲしよう！」という課題を提示した。ホワイトボードを使用し、発表時間は 20 秒間と条件を付け加えた。2017 年に日光を訪れた観光客数は 1200 万人を超え、外国人宿泊客数も 10 万人を超えている。毎年のように本校にホームステイに来る高校生がいることから、生徒たちは海外の方と触れあう機会が多い。また、グローバルな視点から和食を捉えてほしいというねらいもあり、課題を設定した。身近なことを課題にしたことで、活発な話合いが行われていた。限られた時間の中で、和食のよさを伝えるためには、それぞれの視点から考えたことを基に、新たに自分たちなりの適切な考えを見つけていかなければならない。展開１の活動で得た情報は、どの視点も和食のよさを見つけることができる。しかし、「ホームステイに来た外国の高校１年生に、どんな点を伝えればよいのか」という課題の答えを探すために、お互いの考えを伝え合っていた。互いの意見で共通する部分を適切に表現するための言葉を吟味し、考えが複数あるためどれに焦点を絞ったらよいのか思いを伝え合っていた。ホワイトボードを活用し、意見を全て書き出し、精選しているグループもあった。さらに、英語やローマ字でホワイトボードをまとめるグループや、英語を使って発表しようとするグループも見られた。20 秒の制限に苦戦しているグループもあったが、どのグループも最後まで粘り強く課題に取り組んでいた（**図４**）。

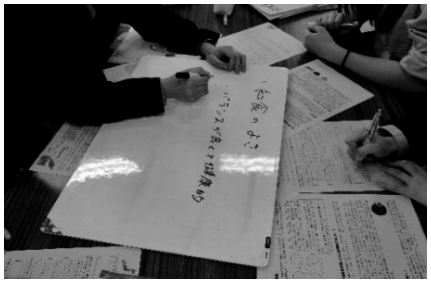


図４　ホワイトボードの活用

エ　展開３

グループ活動の成果を発表するグループごとにホワイトボードにまとめた考えを発表した。「和食のよさ」についてあらゆる方法で様々な角度から考え、捉えることができていた。また、

発表を聞く生徒たちも、それぞれの発表にしっかりと耳を傾けることができた。発表を聞く側も、他のグループの考えを基に、自分の考えを広げる姿が見られた。聞き手に効果的に伝えるための工夫をしていた。

オ　まとめ

授業を振り返って、個人で「和食のよさ」に改めて向き合った。生徒がまとめたワークシートの記述（**図５**）を見てみると、多くの生徒は授業の導入時よりも、授業のまとめの時点での記述量が増えた。また、個人活動①では、箇条書きで記述していたが、個人活動②では文章で表現する生徒が増えた。「和食」は誰もが何度も聞いたことのある言葉であるが、「和食とは」、「和食がもたらす影響」などと考えて、話して、また考えて、様々な視点から「和食のよさ」と向き合うことで、自分の考えを広げながら理解を深めていることが見て取れた。「和食のよさ」について考えることを通して、自分の食生活の課題意識をもつことができた生徒もいた。

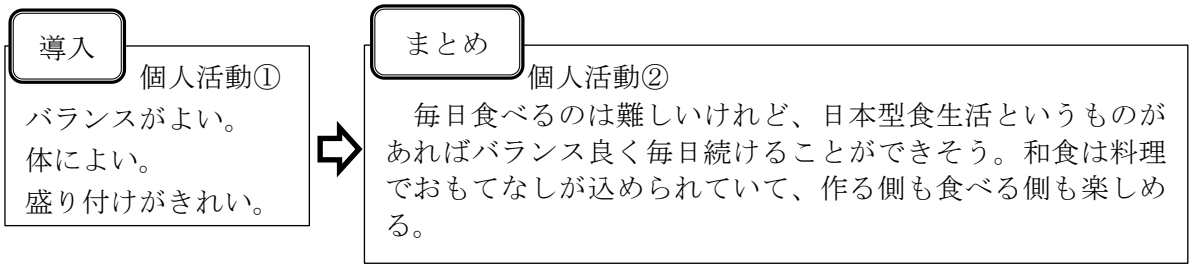


図５　ワークシートの生徒の記述

５　更なる改善に向けて

(1) 成果

本事例では、和食について、異なる視点の資料を与え、その資料の情報から分かったことや考えたことを説明し合い、互いの意見を理解するジグソー法を活用し、対話を通して考える活動を取り入れた。

導入とまとめに個人活動の時間を確保したが、同じ問いから考えることで、自分の考えを確認するとともに、自分の学びの変容が自覚でき、このような場面を設定することが大切だと実感した。生徒は、個人活動①の考えに加え、個人活動②では、授業の学びから自分の食生活を振り返り、改善に向けての考えや、これからの自分の食生活についての考えも記入していた。単に「和食のよさ」に気付くだけでなく、生涯を通して健康に過ごすために必要な考えにまで及んでいることが分かる。生徒の授業後の振り返りの意見の中には、「和食のよさを考えることで、地産地消の必要性や郷土料理への思いが分かった」「グループのメンバーと意見交換をすることで、バランスのよい食生活に対する考えが変わった」「今までいかに濃い味付けを好んでいたかが分かり、素材やだしのうま味を生かす調理法を考えた」「食材を使い切る方法を考えた」等があった。対話によって多様な考えに気付き、望ましい食習慣、環境に配慮した食生活、食文化の継承に対する問題意識へと、つなげることができた。今回の学びが、授業だけにとどまるのではなく、生涯に向かって広がったと考えられる。

(2) 課題

食生活に関心がない生徒に、どうすれば自分事として取り組むことができるのか、適切な問いをよく吟味して設定することが必要である。問いによって、自ら食生活について様々な視点から学び、対話を通して繰り返し考えることで、多様な選択肢の中から自分の価値観を見いだすことが可能になる。そのためにも、生徒の実態に応じた適切な問いを設定し、その解決の糸口となる対話が生まれるような授業実践をしていきたい。

〔参考文献等〕

・農林水産省『「和食」のユネスコ無形文化遺産登録 5 周年！』
http://www.maff.go.jp/j/keikaku/syokubunka/wasyoku_unesco5/unesco5.html
「和食；日本人の伝統的な食文化」
・農林水産省『平成 26 年度「和食」の保護・継承に関する検討会報告書』
http://www.maff.go.jp/j/keikaku/syokubunka/culture/index.html#4.
「和食」の保護・継承推進検討会
・東京大学「CoREF　知識構成型ジグソー法」
http://coref.u-tokyo.ac.jp/archives/5515

事例２　「衣生活の科学と文化」における指導の工夫 ～　対話を通して、「これからの衣生活」を考えよう　～	
単元名	＜家庭総合＞　衣生活の計画と管理
これまでの課題	これまで、対話的な活動を授業の中に取り入れることは難しいと感じていた。そのため、教師主導の知識伝達型の授業が多くなりがちであった。その結果、衣生活について学んだことを実生活と結び付けて考え、実践する姿勢が身に付いているとは言い難い。
授業改善のポイント	衣生活への関心を高める課題に取り組むことで、衣生活について自分の考えをもち、対話を通して多様な考え方を知ることで、よりよい衣生活を模索することができるように工夫した。また、衣生活と被服を取り巻く現状について、消費者や企業など様々な角度から考えることを通じ、自己の衣生活の課題を見つめ、装うことを楽しみながらも、環境負荷の少ない衣生活について考えをもつことを目標とした。

１　指導観

(1) 本単元について

私たちが生活していく上で、衣服との付き合いはずっと続いていくものであり、「衣生活の計画と管理」は社会的にも、自分の健康を守る上でも、とても大切なものである。本単元では、衣生活に関心をもたせるとともに、ライフステージの特徴や課題に着目し、被服管理について学ぶなど、生涯を通してよりよい衣生活を送るために必要な知識や技術を習得し、「主体的に衣生活を営む姿勢」を育てることが目標である。

(2) 生徒の実態

「ファッションに興味がある」、「服が好き」という生徒が集まっており、衣服に対する興味・関心は非常に高い。しかし、生徒たちは流行に左右されがちであり、購入しても衣服を着る期間は１年くらいのため、活用されない衣服も多い。そのため、衣服購入の計画や活用、限りある資源について考えるなど、資源や環境に配慮した社会を目指した衣生活を営む姿勢はあまり感じられない。

(3) 生徒に身に付けさせる力

雑誌やＳＮＳ等による流行の情報や、インターネットでの手軽な購入、ファストファッション、被服素材の多様化等、現代では生徒たちを取り巻く衣生活の状況は変化してきている。そのような中、よりよい衣生活を送るにはどうしたらよいのか、自分で考え、適切に判断し、行動できることが大切である。ここでは、衣生活の現状について消費者や企業等の考えに触れ、対話を通してそれぞれ自分の衣生活についてのあるべき姿を模索することにより、健康と安全に配慮した衣服購入と活用、資源や環境に配慮した衣生活を営む力を身に付けさせたいと考えた。

２　単元の指導計画及び評価計画

○　単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
衣生活の計画と管理に関心をもち、意欲的に学習に取り組もうとしている。	衣生活の現状や課題を踏まえ、これからの衣生活で自分がとるべき行動について考え、まとめている。	資源や環境に配慮した衣生活を営むために必要な、被服計画、被服管理などの技術を身に付けている。	衣生活の計画と管理について科学的に理解し、主体的に衣生活を営むために必要な知識を身に付けている。

○　単元の指導計画及び評価計画（総時数５時間）

時	学習内容	評価の観点				評価規準
		関	思	技	知	
1	ライフステージと被服				○	・ライフステージの特徴や課題について身体的特性と被服選択のポイント及び着装について理解している。
2・3	被服の管理 ・洗濯実験 ・しみ抜き実験	○		○	○	・被服の材料や構成に適した洗濯及び保管方法、洗剤の働きと汚れが落ちるしくみ、乾式洗濯と湿式洗濯の特徴や原理を科学的に理解している。 ・洗濯やしみ抜きに関心をもち、主体的に学習活動に取り組んでいる。 ・しみ抜きの基本技術を身に付けている。
4本時	環境に配慮した衣生活をつくる		○			・衣生活の現状や課題を踏まえ、これからの衣生活で自分がとるべき行動について考え、まとめている。
5	ミニホームプロジェクト発表	○		○		・健康と安全に配慮した衣服購入と活用について意欲的に取り組もうとしている。 ・資源や環境に配慮した衣生活を営むために必要な、被服計画、被服管理などの技術を身に付けている。

３　本時の展開（第４時）

段階	学習活動	指導上の留意点	評価（方法）
導入 ５ 分	・本時の学習内容を確認する。	・「衣服についてのアンケート」の結果を示し、自分たちの現状を伝える。	
展開 40 分	○グループ活動① ・４人グループになる。 ・配付された資料を読み、情報を整理し合う。 ・資料の内容を参考にしながら、これからの衣生活で自分たちがとるべき行動について話し合う。（課題１、２） ○グループ活動② ・各グループで１名が説明役として残り、３名は他のグループへ出かけて情報交換を行う。 ○グループ活動③ ・はじめのグループに戻り、他のグループで得た情報を互いに報告する。 ○個人活動 ・「服選びのポイント３つ」について考え、記入する。 ・これからの衣生活で自分がとるべき行動について考えをまとめる。	・資料を配付し、様々な視点から考えられるようにする。 ＜配付資料＞ ・衣服のリサイクル率の低さ ・衣服の大量焼却処分のニュース ・流行がつくられる仕組み ・江戸時代の循環型生活 ・他のグループと交流することで、新たな視点を得られるようにする。 ・他のグループの意見を知ることで、より考えが深まるようにする。 ・学習前と同じ内容について考え記入させ、違いに気付かせる。 ・衣生活の現状や課題を踏まえ、今後の衣生活で自分がとるべき行動について考えられるように助言する。	【思考・判断・表現】 衣生活の現状や課題を踏まえ、これからの衣生活で自分がとるべき行動について考え、まとめている。 （ワークシート）
まとめ ５ 分	○ペアワーク ・本時のまとめを隣の人に伝える。 ・ミニホームプロジェクトの確認をする。	・本時で考えたことを今後の衣生活に生かせるよう伝える。 ・ミニホームプロジェクトの説明をする。	

4　実践の様子

(1) 事前の準備

衣生活の現状を把握するために、アンケート調査を行った。また、自分が着る服を「購入する」ことを生徒全員が経験していることから、服を購入する際に自分が考える「服選びのポイント３つ」を、ワークシート（**図１**）に記入した。

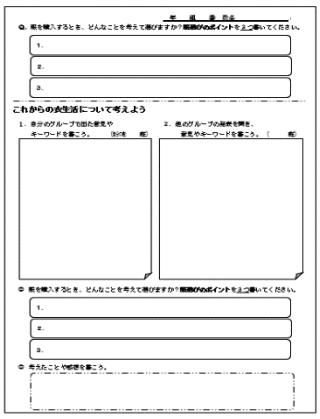


図１　ワークシート

(2) 本時の導入

本時の課題について自分たちの衣生活と結び付けて考えられるようにするため、授業の導入として事前アンケートの結果を示した。アンケートの結果から、衣服を店で購入するだけではなく、半数以上の生徒がインターネットを利用して衣服を購入していることが分かった。また、購入の頻度は月に１～２回程度で、購入した衣服を着る期間は「１年くらい」が最も多く、中には「ワンシーズンのみ」という生徒も数名いた。あまり衣服が活用されず、死蔵衣服になっている状況が見えてきた。

(3) 本時の展開

ア　グループ活動①

(ｱ) 資料を読み、資料について情報を整理し合う

衣生活について、多様な意見が出るよう、「消費者」、「既製服の生産と流通（企業）」、「循環型社会の持続に配慮した衣生活」の３つの立場から述べた資料１～４を配付した。

資料１… 大量に出される不要衣類と、衣類のリサイクル率が非常に低い現状（消費者）
資料２… 新品の服の売れ残りが大量に焼却処分されていたニュース（企業）
資料３… ファッションの流行がつくられる仕組み（企業）
資料４… 江戸時代の循環型衣生活（循環型社会の持続）

各自で資料を読む時間を２分と限定したことで、生徒たちは集中して資料と向き合って情報を整理していた。「もったいない。こんなに処分されちゃうの」、「昔の人ってすごい」など、自分では思い付かなかった考え方に対して反応する様子が見られた。４つの資料から新たな情報を得て、対話の中からその情報をまとめていた。

(ｲ) 課題１：現状の衣生活について考え、問題点や課題について話し合う

衣生活の現状や問題点について、各自が自分の考えを発言できるよう、話合いの前に自分の考えをしっかりともつ必要がある。そのため、資料等から得られた情報を整理して考えを付箋に書いていった。付箋にはできる限り要点だけを書き、模造紙に貼る際は、簡単な説明をした。自分の考えを聞いてくれる人がいることで、説明の工夫があり、話合いが活発になっていた。また、模造紙に貼られた関連性のある内容を関連付けて、「つまり何が言えるのか」を考え、出された意見の考えをまとめていた。

(ｳ) 課題２：これからの衣生活でどのように行動していくべきかを話し合う

課題１で出されたことを踏まえて、今後自分たちがどのように行動していけばよいか活発に話し合

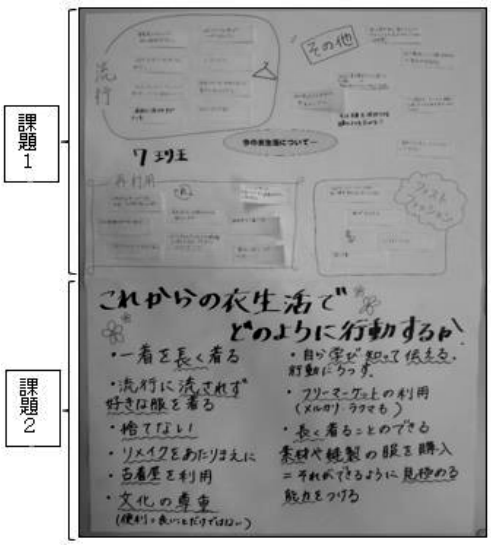


図２　意見をまとめた模造紙

い、自分たちの考えをつくり上げていた。自分自身とグループの考え方の共通点や相異点に気付き、その根拠についても吟味して、自分たちが納得のいく考えを探していた。グループみんなの考えを１枚の模造紙（**図２**）にまとめ、伝わりやすい表現を工夫した。

イ　グループ活動②　他のグループと情報交換を行い、考えを広げる

衣生活についての考えは、各ライフスタイルによっても違ってくる。限られた時間の中で、情報交換をする（**図３**）ことで、自分のグループ以外の考えを知り、対話を通して共有することで、更に新たな気付きを得られた。この活動はワールド・カフェ方式を参考にした。各グループは、効果的に伝えるために、自分たちの考えをまとめた模造紙を上手に活用していた。「ムダのない衣生活」「衣服管理の徹底」等、自分たちの話合いの中から出た意見を熱心に説明する様子（**図４**）が見られた。

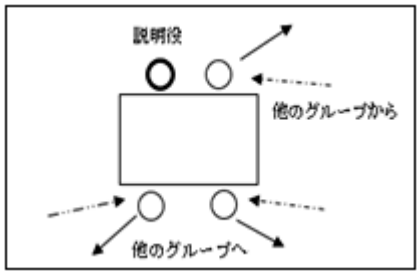


図３　情報交換の動き

図４　説明をする様子

ウ　グループ活動③

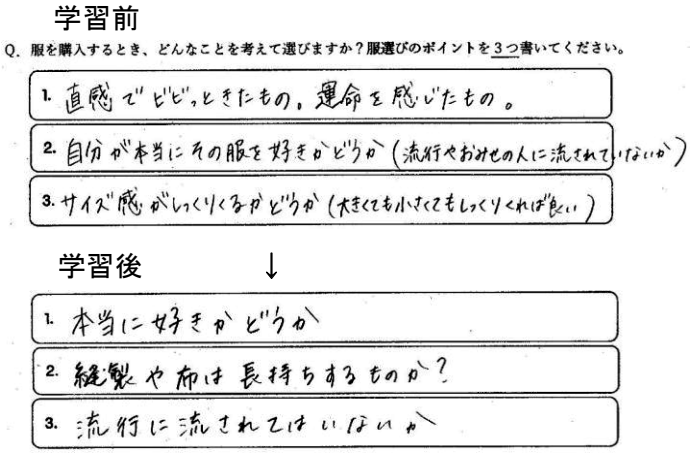
自分のグループに戻り、他のグループから持ち帰ってきた内容を、自分のグループのメンバーに報告した。自分たちのグループの意見にはなかった新たな意見を中心に報告をさせることで、効率よくできるようにした。

この活動によって、自分たちのグループも含めて４つのグループの意見を共有することができる。ワークシートのまとめ（**図５**）からも分かるように、自己の考えを更に広げて自分の衣生活を考えることができていた。

エ　服選びのポイント３つを再び考える

本時の学習を通して学んだことを踏まえ、「服選びのポイント３つ」を各自で考えた。考えの変化が分かるよう、学習前と同じ質問にした。他者の考えを踏まえ、自分の考えを明確にしたり修正したりして記入していた。

自分なりの新しい考え方や捉え方によって、考えに変化が現れた。ある生徒の記述（**図５**）を見ると、学習後に書いた「長持ち」という文字から分かるように、自分の価値観に循環型の被服計画の観点をもつことができた生徒もいた。


学習前

Q. 服を購入するとき、どんなことを考えて選びますか？服選びのポイントを３つ書いてください。

1. 直感でビビッときたもの。運命を感じたもの。
2. 自分が本当にその服を好きかどうか（流行やおみせの人に流されていないか）
3. サイズ感がしっくりくるかどうか（大きくても小さくてもしっくりくれば良い）

学習後　↓

1. 本当に好きかどうか
2. 縫製や布は長持ちするものか？
3. 流行に流されてはいないか

図５　ワークシートのまとめ（服選びに関する項目）

オ　これからの衣生活で自分がとるべき行動について考えをまとめる

多様な情報や他者の考え方から「自分がとるべき行動」をまとめた。生徒が記入したワークシートの記述（**図６**）から、消費者として既製服の入手と活用について「健康・快適・安全」、「持続可能な社会の構築」視点から捉え、よりよい衣生活について現状から最適と考えられる行動を見いだすことができていた。

～生徒のまとめより～
・廃棄される服が少しでも減少するように、消費者として一着購入するときに、本当に必要かどうかよく考えてから購入していきたい。また一着一着を大切にし、長い期間着用できるよう手入れもしっかりとしていきたい。
・衝動買いが多く、結局ほとんど着ないで捨ててしまうことがあるので、企業や生産者のこともよく考えてから購入したい。インターネットを利用して服を購入するときは実物を確認することができないので、サイズや組成についても検討してから購入したい。
・４つの資料を見て、今までの自分の行動を見直すべきだと感じた。服を着回すこと、買う前に目的を少し考えるということは簡単にできるので、心がけていきたい。リメイクもできるようになりたい。

図６　ワークシートの記述

５　更なる改善に向けて

(1) 成果

本事例で扱った「これからの衣生活で自分たちがとるべき行動は？」という課題は正しい答えのないものである。したがって、対話による学習活動等を通して、多様な考えの存在に気付くことが重要になる。対話にも様々な形があるが、本事例ではワールドカフェの手法を用いた。グループとして１つの結論を出すのではなく、一人一人が自由に意見を交わすワールドカフェ方式は、個々の考え方の違いが明確に現れ、より多様な考え方に触れることができると考えたからである。生徒たちは、日頃から個性や目的に応じて衣服を購入しており、衣生活は身近なものである。しかし、生涯を通じて衣生活の計画と管理が適切にできるようにするためには、個人の価値観にとらわれるだけでなく、消費者や企業などの観点に立って考え、より多くの考えに触れる必要がある。ワールドカフェ方式で、対話を繰り返し行うことにより、様々な考え方に触れ、「そんなことは考えたこともなかった」、「自分もそうしようかな」等の発言があり、よりよい衣生活を追究する姿勢を育むことができた。ワークシートを見ると生徒の記述の中に、「廃棄」「着ないで捨ててしまう」「見直す」という言葉が入っており、自己の衣生活の課題にも気付いたことが分かる。また、その解決の糸口として、「長い期間着用」「サイズや組成についても検討」「リメイク」という言葉が出てきたことから、消費者として既製服を入手するために必要な情報や循環型の被服計画の必要性に気付き、各自の生活スタイルに合わせたよりよい衣生活に関する思考が深まったことが分かる（**図６**）。

(2) 課題

家庭科において大切なことは、生活の課題を自ら解決する実践力を育むことである。単元計画の中に、ホームプロジェクトを位置付けることで、実践力を身に付けることを可能にすることができる。生徒が主体的に生活を営むことができる実践力を身に付け、継続できるための指導について、日々の授業の中で探っていきたい。

〔参考文献等〕
・日本経済新聞出版社　香取一昭・大川恒「ワールド・カフェをやろう！」（2017 年４月）
・栃木県総合教育センター『「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善【理論編】』（平成 30 年３月）